

北斎 ～富士を超えて～ 大英博物館 国際共同プロジェクト

あべのハルカス美術館（大阪・阿倍野） 2017.10.06～11.19



「葛飾北斎」(1760～1849)は、江戸時代後期の浮世絵師で、欧州の印象派画家「ゴッホ」「ドガ」「モネ」「マネ」らに多大の影響を与えた稀代の画家として著名である。

「北斎」は、70年にも及ぶ画業の中で、様々な画法を学び森羅万象を描き、風景や動植物のような目に見える世界だけではなく、晩年には龍や鳳凰、聖人などを題材にして、日常を超えた創造の世界を肉筆画で表現していることは特筆すべき巨匠である。

本展は、英国・大英博物館との国際共同プロジェクトにより、還暦以降の晩年30年間に描かれた作品に焦点を当てて、画伯が90歳まで描き続けて追い詰めた美の世界に迫るものである。



ふがく
《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》(1830年頃)

富嶽とは「富士山」を指し、“The Grate Wave”として、世界で最も知られる作品で、リズム感のある奇抜な構図の斬新さ、デザイン性、一瞬を捉えた魅力の壮大な作品である。荒れる大浪の先端は、怪物の触手のように爪を立てて、三艘の小舟の押送船はいまにも大浪に食われそうな勢いだ。

《富嶽三十六景 凱風快晴》は、大自然の象徴である名山「赤富士」を描いた画伯の代表的な作品である。

「凱風」とは、“初夏に吹くそよ風”の意味で、夏の早朝の一瞬、太陽に映えて全山が紅色を呈することがある現象である。

朝焼けに映える朱の山肌、稜線の白い雪、紺青の空、幾重もの縹雲など、明快な色彩と単純化された姿の富士山像である。



北斎作の「三十六景シリーズの浮世絵の風景画作品」は、非常に人気を集めたため「10枚」が追加され合計「46枚」となり、当時は「名所絵」と呼ばれており、「役者絵」や「美人画」と並ぶジャンルとして確立したものとされている。